

第4節 東平1号墳出土鉄鏃の評価と意義

藤村 翔

はじめに

駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鏃については、長三角形式や五角形式、三角形式に代表されるようなヴァリエーション豊かな平根系鉄鏃が目立つこと（井鍋 2003、長谷川 2003、藤村 2011）、20～30 本以上の大量の鉄鏃を保有する古墳が数多く認められること（菊池 2016、大谷 2004、藤村 2017）などの特徴が先行研究でも指摘されている。また、古墳時代のものとしては東海地域唯一の鍛冶具を出土した中原 4 号墳のほか（鈴木 2016 など）、鍛冶生産に関わる特殊遺物（祭祀具）としての性格が推定されている鉄鐸を保有する古墳も当地域に集中する状況から、小規模な鉄器製作や鉄鏃の地域生産が行われていた可能性も考慮しておく必要がある一方で（藤村 2017）、当地域の鉄鏃組成やその変遷を検討する分析は井鍋 菅之氏の検討（井鍋 2003）以降低調であり、近年になって目覚ましい調査成果が相次いで報告されている当地域の後・終末期古墳出土資

料を反映した編年を再構築する意義は大きい。

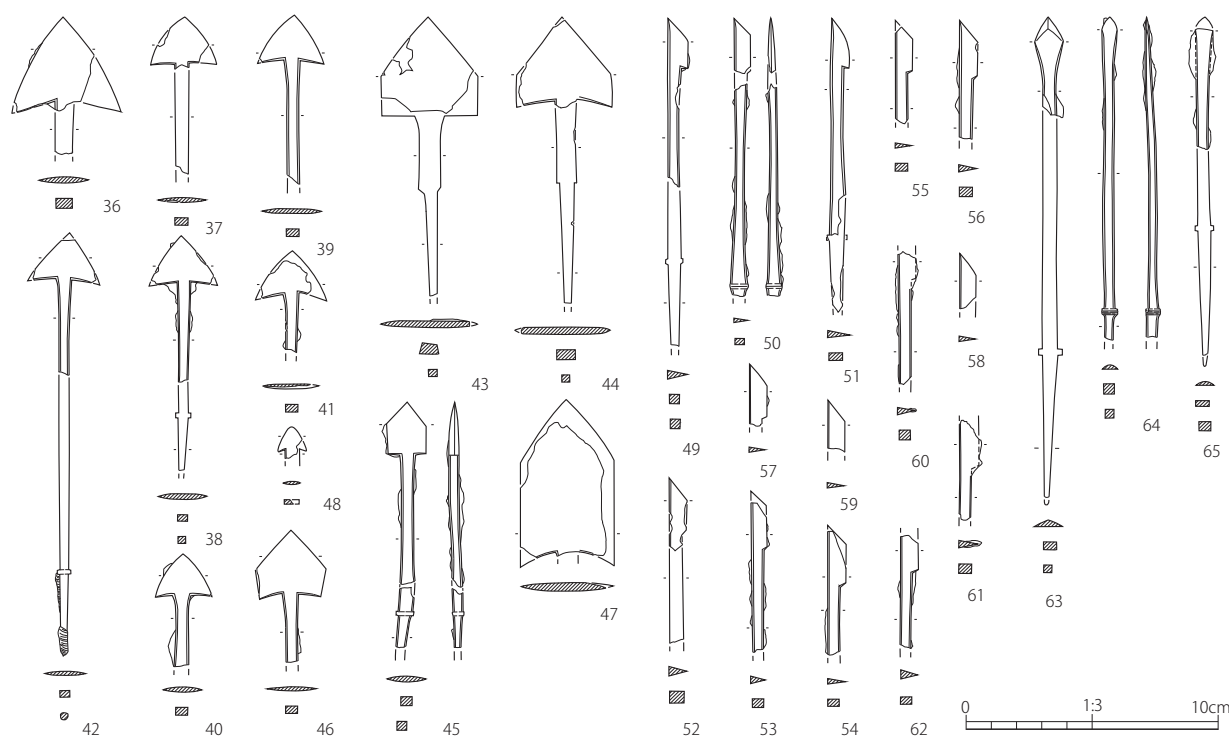
上記のような問題意識のもと、本稿では駿河東部地域における 7 世紀代の代表的な有力首長墳の一つであり、また計 30 点という比較的多量の鉄鏃を保有する東平 1 号墳の資料の特徴を整理し、当地域における鉄鏃組成の時間的推移のなかで本資料が有する意義を考えたい。

1 東平1号墳の鉄鏃組成とその特徴

(1) 概要

東平 1 号墳の横穴式石室内から、平根系鉄鏃が 12 点、尖根系鉄鏃が 18 点、計 30 点の鉄鏃が出土している^(註1)。このうち、平根系鉄鏃は三角形式が 7 点、五角形式が 5 点、尖根鉄鏃は三角形式が 1 点、片刃箭式が 14 点、鑿箭式が 3 点を数える(第 84 図)。

平根三角形式 (36～42) のうち、大型の 36 は鏃身部長 3.8cm、鏃身部最大幅 4.2cm を測り、平面形が正三角形に近く、浅い腸袂を有する。頸部以下が



第 84 図 東平 1 号墳の鉄鏃

欠損するが、本来は43のような短頸の平根鏃であったと考えられる。36を小型にしたような37～42は、いずれも鏃身部長が1.8～2.0cm、鏃身部最大幅が2.6～2.9cmに収まり、浅い腸袂を有する規格性の高い長頸鏃群である。頸部は判明しているもので幅0.5cm程度、長さ5.5～11.7cmを測り、全長にはバラつきがありそうである。茎関が判明するものは、38が棘関、42は幅0.1～0.2cm程度の細い鉄棒を頸部に巻いて関を形成しており、円形関（水野2003など）に類似するが、断面方形の頸部に沿って巻くので、断面は隅丸方形とみられる。本稿では類円形関と仮に呼んでおく。

平根五角形式（43～47）のうち、いわゆるホームベース形の43・44は鏃身部長が3.6～4.0cm、鏃身部幅がともに3.8cmを測り、頸部長も3.0～3.2cmと類似するが、43が腸袂がないのに対し、44は浅い腸袂を有する。45・46はともに長頸鏃とみられるが、45が幅狭の鏃身部なのに対し、46は幅広である。47は鏃身部長5.5cm、幅3.7cmを測る大型の平根鏃であり、頸部以下が欠損しているのが惜しまれるが、平根系鏃のなかでも一際象徴性の高い位置づけの鏃であったと考えられる。茎関は43が撫関、44が角関、45が類円形関とみられる。

尖根三角形式とした48は、浅い腸袂を有する長頸鏃とみられる。

片刃箭式（49～62）は、確認できるものはすべて浅い逆刺を有する形態であるが、逆刺が鋭角のもの（49、51）と鈍角のもの（52～54、55～57、62）が混在する。鏃身部長はいずれも2.0cm程度であり、比較的短小である。茎関は49・51が棘関、50が類円形関とみられる。

鑿箭式（63～65）は、鏃身部が片鑄造で丸みをもつ63と、片丸造で頸部との差が明瞭で無い64・65とが混在する。茎関は63・65が棘関、64が類円形関とみられる。

（2）三角形鏃の特徴

短頸鏃 東平1号墳の平根三角形式鉄鏃でみられるような、幅広な鏃身部を有する資料については、後述する長頸鏃も含め、駿河東部地域の中でも富士川西岸～富士山南麓地域にまとまって分布する

特徴ある形態として注目されている（長谷川2003、藤村2011）。短頸鏃とみられる36の類例をみると、第85図上段に示したように、いずれもふくらの張る幅広な鏃身部を有し、法量も類似した製品が当地域で多く認められる。特に谷津原16号墳から中里K-99号墳、横沢古墳、国久保古墳の資料は類似性が高く、時期的にも遠江Ⅲ期後葉～末葉頃に収まることから、近しい工房で継続して製作されていた製品とみられる。これらの資料と比べると、東平1号墳例は一回り大きく腸袂が鋭角的な形態を採用しており、やや新しい様相とみてよい。Ⅳ期前葉以降に位置づけられそうである。

長頸鏃 幅広な鏃身部（平根）で腸袂を有する37～42の三角形式の長頸鏃は、駿河地域では富士川～富士山南麓地域を除くと、黄瀬川～狩野川流域の下土狩西1号墳や平石4号墳、安部川西岸の牧ヶ谷4号墳や志太地域の原古墳群谷稲葉支群高草地区19号墳でみられる程度の非常に限定的な分布を示す資料であるが（藤村2011）、東日本全体に目を向ければ、内山敏行氏の指摘する「地域型式」^{（註2）}として、7世紀中葉前後に東南北部まで分布が拡大する形態と共通する（内山2003）。分布が極めて集中する富士川西岸～富士山南麓地域の類例をみると（第85図）、遠江Ⅲ期末葉の谷津原12号墳で細身のもの（6）と幅広のもの（7）が登場して以後、国久保古墳や一色D-35号墳、室野坂B-4号墳で東平1号墳例と共通する幅広のものが確認される。幅広のものは国久保古墳で22点、室野坂B-4号墳では24点用意されているので、一定量生産・流通されていたことが窺われよう。形態の細部をみると、谷津原12号墳例では短小・幅広であったものが、Ⅲ期末葉頃の国久保古墳の段階で正三角形に近い整った形態となり、以後、Ⅳ期後葉以降の一色D-35号墳例^{（註3）}や室野坂B-4号墳例にかけて腸袂が次第に鋭角化するという変化を捉えることが可能である。東平1号墳例は腸袂が直角ないしやや鋭角であり、国久保古墳例と一色D-35号墳例の中間的な様相を呈する。したがって、こちらもⅣ期前葉頃の所産とみて大過ない。

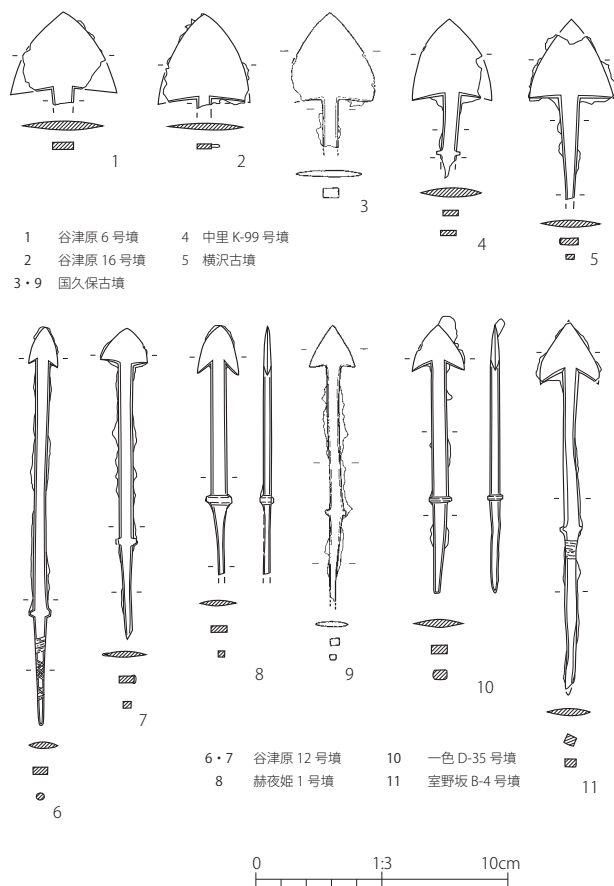
高い規格性 三角形鏃における短頸鏃、長頸鏃の形態は、大小の違いはあれ、相似形のように似通ってお

り、非常に規格性の高い組成と評価されよう。発注から生産・流通までが高度に統率されたなかで被葬者集団へと持ち込まれた可能性を想起させる資料である。

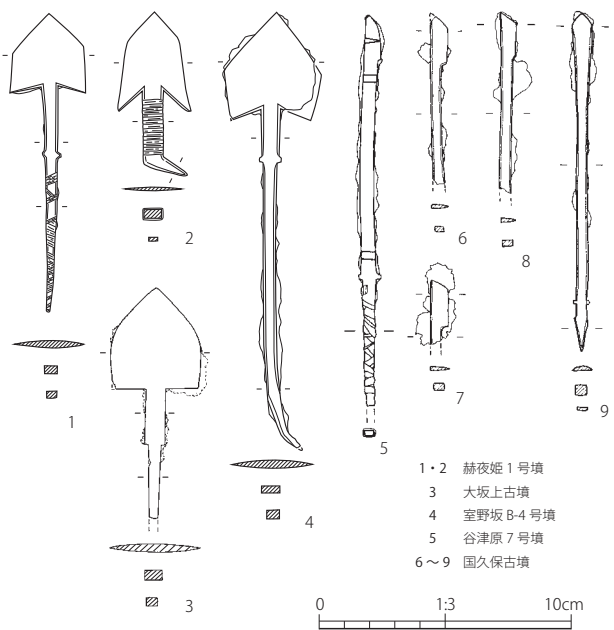
(3) 五角形鏃の特徴

定型的五角形鏃 遠江Ⅲ期中葉以降、駿河西部以東の地域においては、平根五角形式が鉄鏃組成の中心的な位置を占めるようになることが、長谷川睦氏によって指摘されている(長谷川 2003)。第88図に示したように、平根五角形短頸鏃は当地域で群集墳が盛行する時期を通じて存続しており、形態的には鏃身部長が次第に短く、幅が次第に長い、いわゆるホームベース形のものへと変化する。東平1号墳例(43・44)は典型的なホームベース形といえるものであるが、鏃身部の各辺が直線的なのも特徴である。第86図に示した赫夜姫1号墳例(1)や大坂上古墳例(3)はともにⅣ期前葉のものであるが、Ⅳ期後葉の室野坂B-4号墳例(4)では腸袂が鋭角化し、鏃身部幅が根元部分で窄まる形態となっている。東平1号墳例(43・44)については、Ⅳ期前葉に製作された定型的な一群とみてよいだろう。

五角形への指向 当古墳ではほかにも、類例のない特注的大型品の平根五角形鏃(47)があるほか、小型品(46)や長頸鏃(45)と、五角形鏃へのこだわりが強い組成となっている。おそらくは47が東平1号墳の鏃群のなかでは一際大きな象徴性を有した鏃であり、同種ながら様々な法量の五角形鏃が脇を固めたのであろう。ここにも、三角形鏃同様、発注から流通まで統率された中で集められた鏃群の特徴が垣間見える。駿河東部地域においては特に金銅装馬具などを有する上位階層の古墳で五角形鏃が選択されることが多いこと(菊池 2008)、さらに船津L-209号墳例のような無茎の五角形鏃を含め(大谷 2004)、一部の五角形鏃の生産自体が富士山南麓から愛鷹山南麓西部周辺で行われた可能性(菊池 2008)も指摘されているところであり、東平1号墳の被葬者がその生産や流通管理に一定の影響力を発揮していたことが想定される。



第85図 三角形鉄鏃の諸例



第86図 五角形式・片刃箭鏃の諸例

(4) 片刃箭式の特徴

短小な鍔身部 尖根片刃箭式鉄鍔は、駿河東部地域の後・終末期古墳から出土する鉄鍔のなかでも普遍的な形式の一つであり、ほとんどの鉄鍔出土古墳で副葬されている。鍔身部に逆刺や角関・撫関があるものと、無関のものがあり、後者が遠江Ⅲ期末葉以降に増加することが指摘されている（大谷 2003b）。鍔身部に関を有するものについては、鍔身部長が 3.0 ～ 4.0cm 程度あるものが一般的な形態であるが、東平 1 号墳の鍔身部長は、2.0cm 前後と短小な形態をとることに特徴がある。このような短小な片刃箭鍔は、駿河東部地域では谷津原 7 号墳や国久保古墳に類例（第 86 図 5 ～ 8）がみとめられ、いずれの事例も富士川西岸～富士山南麓に集中していることから、当地域内で生産された可能性を想起させる（藤村 2011）。

「共有型式」のなかの地域生産品 片刃箭式や鑿箭式の長頸鍔（「共有型式」）は、畿内地域で生産され、列島各地の地域首長層へ搬入された製品が多いことが内山敏行氏によって指摘されているが、不足する分は在地生産分で補われた可能性もまた想定されている（内山 2003・2011）。同じ駿河東部地域でも、鑿箭式や片刃箭式、柳葉式といった「共有型式」長頸鍔の副葬がⅢ期中葉以降特に卓越する愛鷹山南麓～黄瀬川流域に短小な片刃箭鍔の類例がみられないことは、富士山南麓地域とは非常に対照的な現象である。両地域のこの差は、畿内地域との流通経路の粗密によるものか、あるいは逆に、地域内工房の成熟度によるものなのであろうか。即断しかねるが、富士山南麓周辺が平根五角形式や腸袂三角形式長頸鍔をはじめとする地域流通品に重きをおく鉄鍔副葬方式を採用したことと、間違いなく軌を一にする現象として捉えておく必要があるだろう。

(5) 特殊な茎関について

類円形関 前述した通り、東平 1 号墳の鉄鍔の茎関の多くは、一部の平根五角形鍔を除いて棘関であるが、42・45・50・64 は幅 0.1 ～ 0.2cm 程度の細い鉄棒を頸部に巻いて造られたとみられる類円形関である。頸部～茎部破片資料では、80 ～ 86 が類円形関であり、報告書作成時点で確認できる茎関のなか

での割合は約 3.5 割を占める^{（註 4）}。同種の茎関は遠江Ⅲ期後葉以降、吹上 2 号墳（尖根柳葉式）や東原 5 号墳（尖根柳葉式）、横沢古墳（長三角形式・雁股式など）、赫夜姫 1 号墳（腸袂三角形式長頸鍔、第 85 図 8）、一色 D-35 号墳（腸袂三角形式長頸鍔、同 10）において実測図上では確認できるが、原料の確認ができなかったものもあり、検討の余地がある。また茎部の特殊な仕上げとして、国久保古墳で確認された扁平で逆三角形状の茎（第 86 図 9、藤村 2011）についても、未だ類例が少ないが注意される。これらについては、駿河東部地域における地域内生産の可能性を示す特徴として候補に挙げ、今後の良好な事例の増加を待ちたい。

2 駿河東部地域における

後・終末期古墳出土鉄鍔組成の変遷

(1) 鉄鍔組成分析の意義

鉄鍔組成への視点 駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鍔をめぐっては、個別の形式の変遷観や分布論のみならず、その組み合わせや総量に関わる視点も重視されてきた。井鍋誉之氏は、多量の鉄鍔を有する古墳には平根鍔も多く揃えるような「多種多量タイプ」と、尖根鍔が主体となる「同種多量タイプ」が存在することを指摘し、それぞれの古墳被葬者層で異なる鉄鍔の流通経路を掌握していたことを想定した（井鍋 2003）。一方、菊池吉修氏は富士山南麓や愛鷹山南麓東側では規格性の高い多量副葬古墳（同種多量）が集中する点から、鉄鍔の集約・分配に関わる人格の存在を推定する（菊池 2016）。先学が指摘したような鉄鍔組成の傾向に基づけば、東平 1 号墳の組成は平根鍔が 11 点、尖根鍔が 19 点で両者がやや均衡するが、形式でいえば三角・五角・鑿箭・片刃箭をそれぞれ一定量揃えるので、「多種多量」の部類になるだろうか。

「平根指向」観念の変化を追う しかし、そもそも後・終末期の有力階層の古墳でよくみられると言われる「少量の平根」＋「多数の尖根」という教科書的な組成が、必ずしもすべての有力古墳に貫徹されるわけではない（田村 2003）ということが確認されている中で、駿河東部地域では特に、平根鍔が重視される傾向にあることも指摘されているのであ

第11表 駿河東部の古墳出土鉄鍬構成

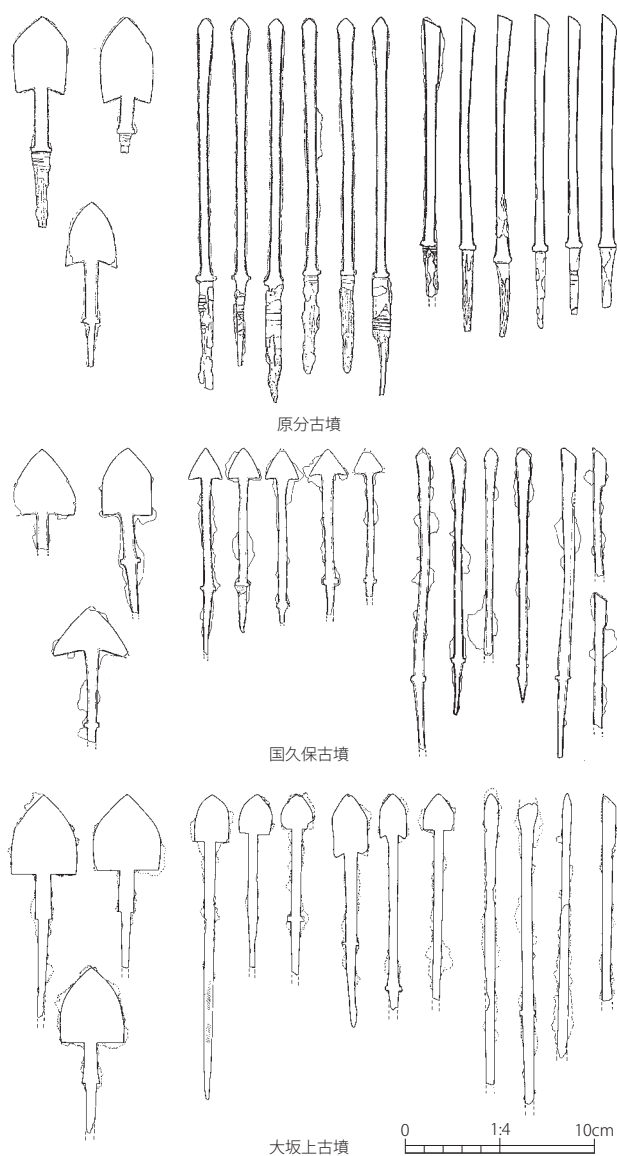
時期（遠江編年）	地域	古墳名	無茎短茎	平根系									尖根系							合計点数 (鍬身部)		両頭金具	備考・共伴遺物
				柳葉	撫開三角	圭頭	方頭	長三角	五角	三角	飛燕	雁股	長三角	三角	五角	片刃箭	鑿箭	柳葉	平根	尖根			
Ⅲ期中葉	1	谷津原 6 号墳	2		2			18		1			3			4		27	23	34		脚付礎・長頸壺	
Ⅲ期中～後葉	2	中原 4 号墳	2	4	3	3	1	27	3							34	13	7	43	54		銀象嵌装大刀・剣、鉄鉋	
Ⅲ期中～後葉 ※1	1	谷津原 17 号墳							1	2			1			5	4	14	3	24		銀装大刀	
Ⅲ期中～後葉	3	清水柳北 3 号墳																41		41		有蓋脚付長頸壺	
Ⅲ期中～後葉	3	中里 K-97 号墳	1					1									1		2	1			
Ⅲ期中～後葉	3	中里 K-98 号墳	1	1									2			1		2	2	5			
Ⅲ期中～後葉	1	谷津原 7 号墳						3					1			6	1	18	3	26		胡籬、石突、鞍	
Ⅲ期中～末葉	3	中里 K-99 号墳		1				3		1								8	5	8		金銅製切羽・責金具	
Ⅲ期後葉	3	石川 6 号墳						5		1		1	11			1	1	5	7	18		脚付短頸壺	
Ⅲ期後葉	2	中原 3 号墳	1					3	1				6			13	3	3	5	25			
Ⅲ期後葉	1	谷津原 8 号墳											9					5		14		金銅製鞘尻金具	
Ⅲ期後葉	3	寺ノ上 1 号墳						1	1				17			2	3	2	2	24		真珠製棗玉	
Ⅲ期後葉	3	吹上 2 号墳														1	1	12		14	2	類円形関	
Ⅲ期後葉	5	天神洞 1 号墳											2				2	8		12			
Ⅲ期後葉～ Ⅳ期前半	2	横沢古墳						2	2	2		1	2			7	2	1	7	12		金銅製装身具・銅鈴、貝装帯金具、類円形関	
Ⅲ期後葉～ Ⅳ期前半	3	秋葉林 1 号墳	1					2	1		1					12	6		5	18	6	金銅装圭頭大刀 (尖根の茎関数は 26 点)	
Ⅲ期後葉～末葉	3	清水柳北 2 号墳														10		26		36		乳文鏡	
Ⅲ期後葉～末葉	1	石川 119 号墳						3	5	2	1					4		2	11	6		銅鈴、金銅装大刀、篠籠手	
Ⅲ期後葉～末葉	6	夏梅木 6 号墳						3	1							4	5	1	4	10	3	金銅装大刀、金銅装刀子、紡錘車棒軸	
Ⅲ期後葉～末葉 ※1	3	東原 5 号墳											1					32		33		大刀 5 振、類円形関	
Ⅲ期後葉～末葉 ※1	1	谷津原 15 号墳	1					5					4			2			6	6	3		
Ⅲ期後葉～末葉 ※1	1	谷津原 16 号墳								1			3	2	1	3	3		1	12		銀装大刀	
Ⅲ期後葉～末葉 ※1	3	東原 1 号墳											1	1		4	2	9		17		貝装帯金具？	
Ⅲ期末葉	3	中里 K-95 号墳	1						1				2	1	10	5	10		2	28		金銅装圭頭大刀	
Ⅲ期末葉	1	谷津原 12 号墳				1	6	2	1	1			3						11	3	4		
Ⅲ期末葉	1	谷津原 2 号墳					1			1			8			3	7	5	2	23			
Ⅲ期末葉	3	的場 3 号墳	1				9		1				11			5	4	6	11	26	4	鉄鐔	
Ⅲ期末葉	6	夏梅木 9 号墳														6	1			7		銅釧	
Ⅲ期後葉～ Ⅳ期前葉	3	須津 J-6 号墳														8	5			13		針	
Ⅲ期末葉～ Ⅳ期前葉	4	原分古墳							2	1						16	22		3	38	17	家形石棺、金銅装大刀・銀象嵌装大刀、金銅装馬具	
Ⅲ期末葉～ Ⅳ期前葉	2	国久保古墳							1	24	1					4	23		26	27		銀装大刀、鉄鐔、雁木玉	
Ⅳ期前葉 ※1	3	井出 1 号墳				1		5								2			6	2		金銅製棺座金具	
Ⅳ期前葉	4	下土狩西 1 号墳					3		4				6				1	1	7	8	2	家形石棺、金銅装頭椎大刀	
Ⅳ期前葉	2	赫夜姫 1 号墳				1	1	14	1	1		2							18	2		紡錘車、類円形関	
Ⅳ期前葉	3	須津 J-159 号墳					2	3	5	1							5		11	5	6	鉄製硝目金具・刀装具	
Ⅳ期前葉	2	大坂上古墳						5	3							1	3		8	4	4	金銅装方頭大刀	
Ⅳ期前葉	2	東平 1 号墳						4	7					1	1	14	3		11	19	1	銀象嵌装大刀、丁字形利器、金銅装馬具、類円形関	
Ⅳ期前葉	3	船津 L-62 号墳	2			1		2	3		1	8			4	1	6	1	9	20	6	銅装馬具	
Ⅳ期前葉	3	石川 22 号墳							4										4				
Ⅳ期後葉	1	室野坂 B-4 号墳							1	24						11			25	11		銀象嵌装責金具	
Ⅳ期後葉 ※1	2	一色 D-35 号墳								5									5			鈎帯金具、銅装鞘尻金具、銀装刀子、類円形関	
V 期	1	妙見 I-2 号墳				1			3								13		4	13		有蓋短頸壺	

凡例

時期 ※1：築造時期の参考となる遺物が少ない

地域 1：富士川西岸 2：富士山南麓 3：愛鷹山南麓 4：黄瀬川流域 5：狩野川流域 6：箱根山西麓

合計点数：平根の合計点数は、無茎・短茎を含む。



第 87 図 鉄鏃構成の類例（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）

り（長谷川 2003 など）、畿内地域の首長墳で指摘される尖根への指向性よりは、同地域の群集墳層にみられる平根への指向性（豊島 2002）と共通する部分が大きいと考える。そうであるならば、平根系鏃を重視する古墳における鉄鏃組成の時間的推移を明らかにすることができれば、「同種多量」・「多種多量」の議論から一歩進めて、鉄鏃に対する考え方を比較的共有する集団の中で、鉄鏃への観念がいかに変化したのか、またその組成自体にどのような指向性が働いたのかを検証することも可能になってくるのではないだろうか。そのような過程を経ることで、初めて東平 1 号墳の鉄鏃組成が評価しやすくなると考える。

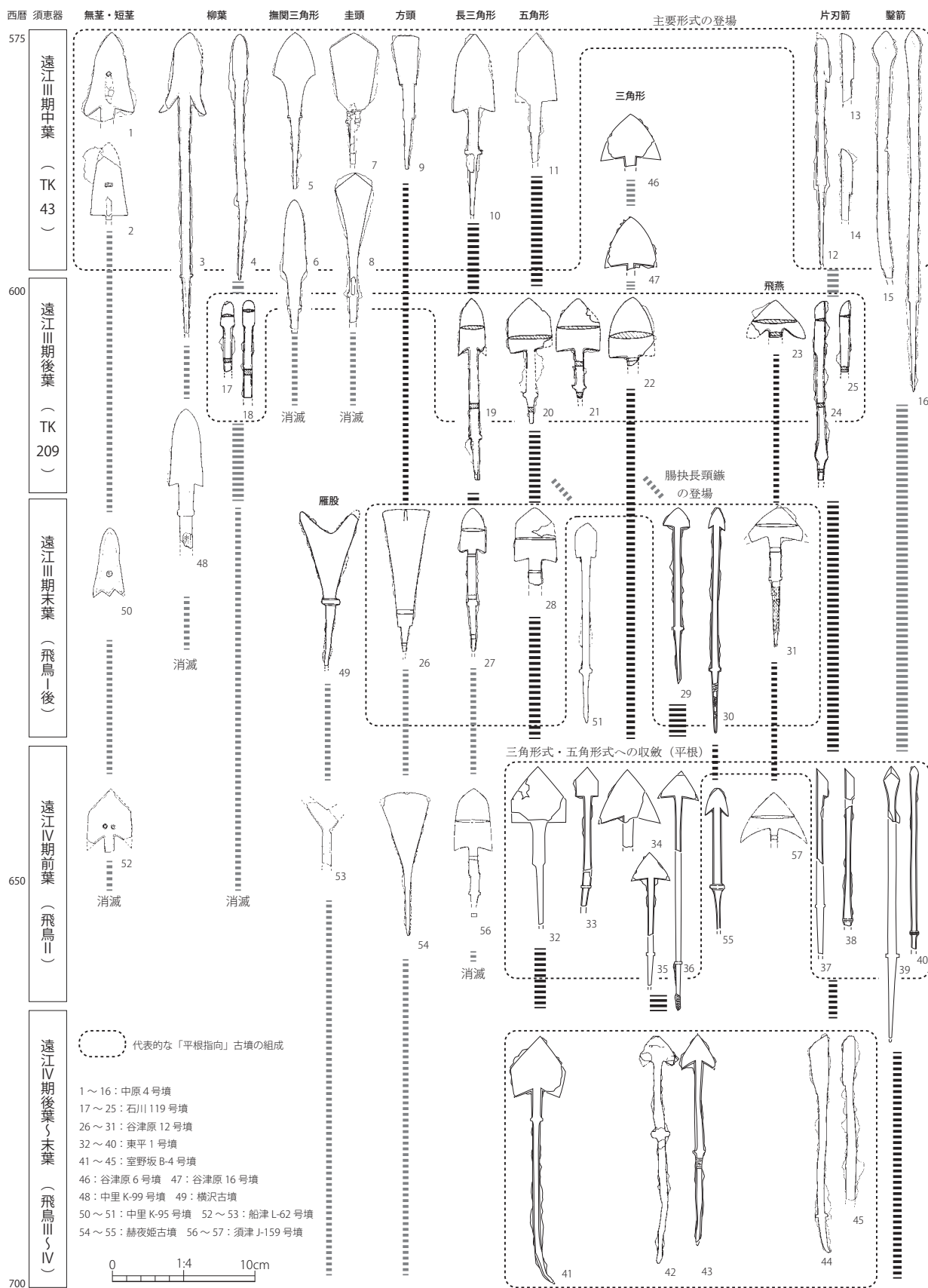
上記の問題意識のもと、駿河東部から一部伊豆地

域を含む主要な鉄鏃出土古墳を集成し、各鉄鏃形式の出土点数や相伴遺物を時期別に示した（第 11 表）。鉄鏃の数量を求める際に、他の副葬品の時期や鉄鏃型式の細分によって初葬・追葬を分けてカウントすることは理論上可能であるが、資料操作によって異なる結果を導く危険性もある（内山 2011）。現状の研究水準では悉皆的に埋葬単位別の鏃群を抽出することは困難なことから、同一埋葬施設出土の鏃を集計している。

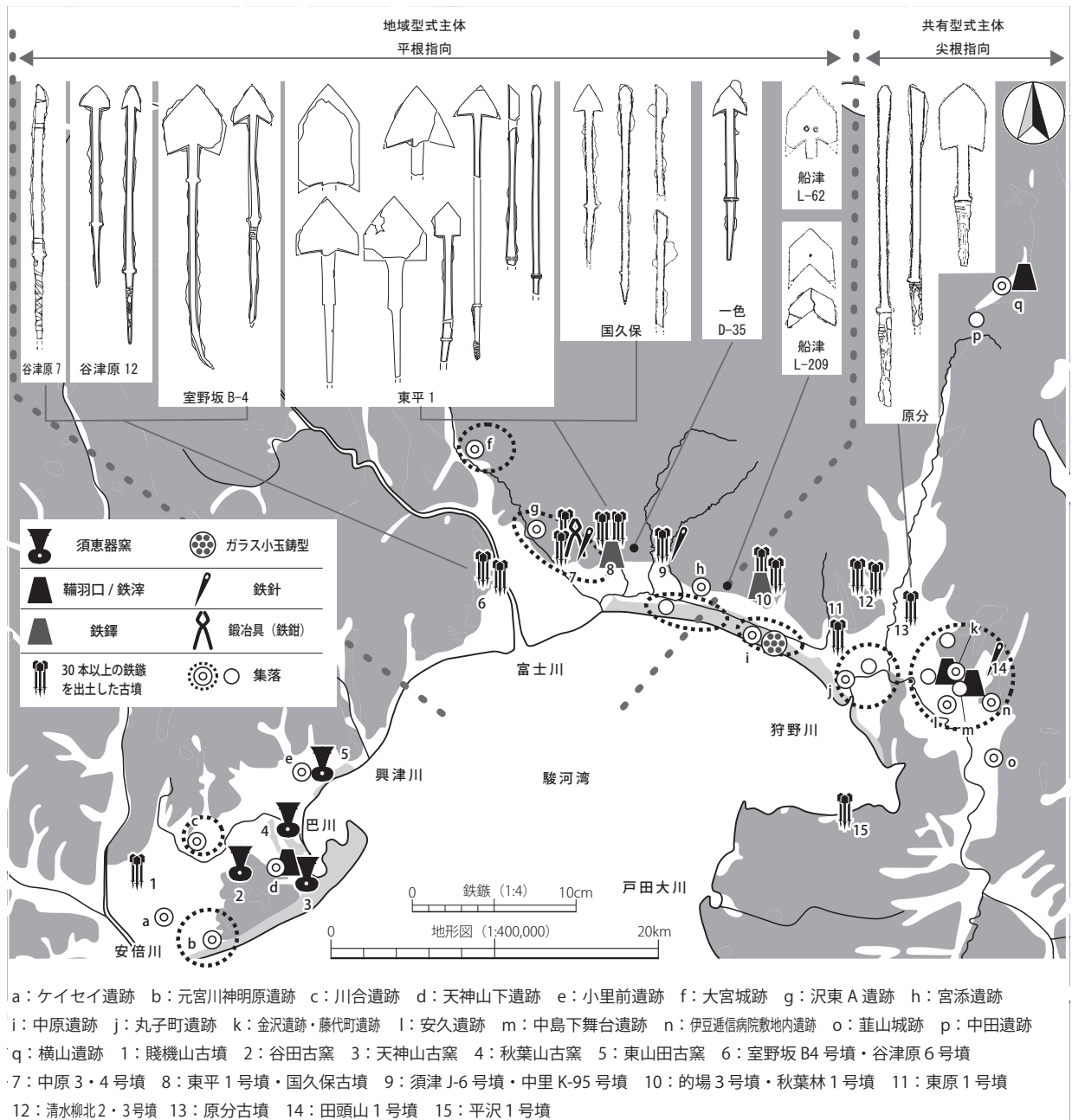
（2）鉄鏃組成の変遷

遠江Ⅲ期中葉～後葉 第 11 表および主要な「平根指向」古墳の鉄鏃組成をまとめた第 88 図を見るに、まず時期が新しくなるにつれ、副葬鉄鏃の種類が少なくなっていくことがわかる。遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式併行期）頃の中原 4 号墳や谷津原 6 号墳の段階で、律令的形式ともよばれる雁股式や飛燕式を除くほぼすべての形式が出揃っており、以後の当地域の副葬鉄鏃の展開は、ほぼこの段階である程度方向付けられたと言ってよい。具体的には、平根系鏃の長三角形式・五角形式・三角形の主要 3 種が現れ、これらはⅢ期末葉（飛鳥Ⅰ後半）頃までの「平根指向」古墳の必須形式となっている。特に中原 4 号墳の鉄鏃は「多数の尖根＋多種多量の平根」といえるものであり、「多数の尖根＋少数の平根」という古墳時代中期後半以降顕在化する一般的な鏃構成（田村 2003 など）に、「多種の平根」という駿河東部地域の特徴が加わり、さらに、鉄鏃の生産や流通に携わる立場にあった被葬者が、西日本各地との交流や平根鏃の有する象徴性を重視して集めた結果成立したと考えられている（菊池 2016）。しかしむしろ、中原 4 号墳の被葬者が達成した「平根鏃を多数揃えるという指向性」こそが、駿河東部地域の一定の集団に大きな影響を与え続けたと考えたい。

遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉 そのような組成にも、Ⅲ期末葉からⅣ期前葉（飛鳥Ⅰ後半～Ⅱ）を期に、変化が訪れる。原分古墳や国久保古墳、東平 1 号墳、大坂上古墳といったいずれも装飾付大刀あるいは金銅装馬具といった副葬品を有する有力古墳において、平根長三角形式がみられなくなり、平根系鏃の主要形式が、五角形式と三角形式に収斂されるの



第88図 駿河東部地域の後・終末期古墳における鉄鏃組成の変遷



第 89 図 駿河・伊豆地域の手工業関連遺跡と地域型式鉄鐮の広がり

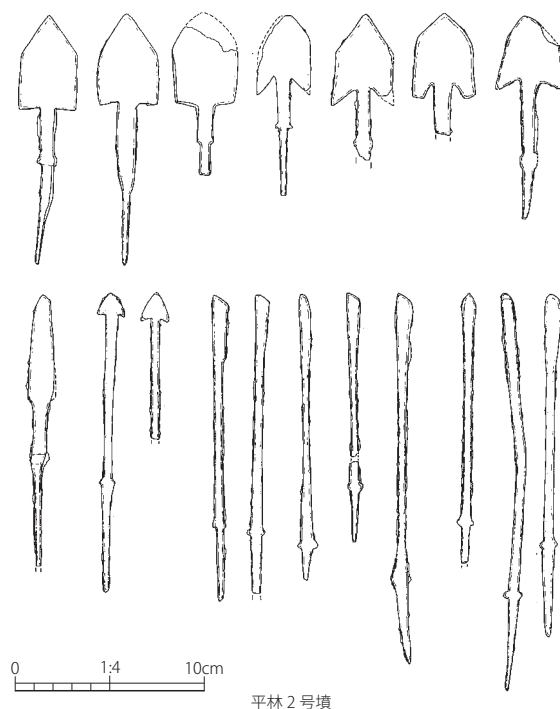
である（第 87 図）。無論、同時期のすべての古墳において達成されたのでは無く、他の形式を依然副葬する有力古墳も少なからず存在するのであるが、「平根指向」の集団内にも平根の種類を厳選する指向性が出たことを評価したい。特にⅣ期前葉には東平 1 号墳例のような定型的なホームベース形の平根五角形式が創出され、五角形式が「地域の顔」としての様相を帯びてきたことが推察される。

終末期古墳の鉄鐮と地域生産 それでは、鉄鐮形式が収斂されるという現象は、どのような背景によって行われうるのであろうか。一般的に、7～8

世紀にかけての鉄鐮は、鐮身部が矮小化した鑿箭、片刃箭といった尖根系鉄鐮と、方頭式、飛燕式、雁股式、長三角形式、柳葉式といった平根系鉄鐮との組み合わせが基本となり、列島中央部から東日本地域で共通性が高い形態へと収斂されるが（津野 1990）、そうした背景には、中央で設計された見本（様《ためし》）を参考に、列島各地で鉄鐮の生産が活発化した結果と考えられている（津野・内山 2017）。特に、鑿箭・片刃箭が王権中枢から地域首長層を中心に配布された「共有型式」として捉えられる一方、三角形式などの腸袂長頸鐮や三角形式・五角形式な

どの平根系鏃は東海～東日本各地で製作され、中小古墳を中心に供給された「地域型式」として認識される(内山 2003・2011)。後の郡家につながる地域拠点において鉄器の地域生産が活発化する中、平根系に代表されるような鉄鏃の象徴性は薄れ、日常的・実用的な武器としての側面が強調されるようになっていったと考えられているが(鈴木 2003)、そうであるならば、当地域において東日本的な象徴性を帯びた無茎式・短茎式が消失し、平根系が五角形式と三角形式を中心とする組成に収斂していくことは、やはり鉄鏃の地域生産と密接に関わった現象と捉えられる。先に筆者は、鉄鏃を多量に保有したり、鉄鉗・鉄鐸といった鍛冶関連遺物を副葬したりする古墳や、鍛冶関連遺物が出土した集落の分布から、駿河東部地域において6世紀後葉から7世紀にかけ、鍛冶関連の手工業生産が発達した状況を想定したが(藤村 2017)、鉄鏃組成の変遷からは、7世紀中頃を前後する時期に、鉄器生産上の第二の画期が到来したことが想定されるのである(第89図)。7世紀後半以降にはそうした鉄鏃形式収斂の流れは一層押し進められ、雁股・方頭・五角形・三角形・片刃箭・鑿箭のいずれかを複数選択する少種組成に変化する。この段階を律令的鉄鏃組成の完成とみるのであれば、7世紀中頃前後から始まる鉄鏃組成の収斂化の波も、後の郡家につながるような地域拠点を中心とする地域生産の成熟と進展の文脈で捉えてよいだろう。

軍事的観点からの評価 また、7世紀中頃にみられる「共有型式」の片刃箭・鑿箭と、東国の「地域型式」である腸挟三角形式長頸鏃と平根五角形式短頸鏃によって構成される鏃群については、岡安光彦氏が信濃・甲斐・駿河地域を中心に編成された「東国舍人騎兵」の鉄鏃として評価している(岡安 2013)。岡安氏が「甲斐の勇者」の古墳と認める平林2号墳の鉄鏃組成は、平根五角形式、尖根片刃箭式・鑿箭式に腸挟長頸鏃が加わるもので、当地域とも共通点が多い(第90図)。鉄鏃組成以外にも、駿河東部地域をめぐっては、石室規模の大小や装飾付大刀の保有などによる階層分化が発達した古墳群の並立(藤村 2016)や鉄器生産・紡織・皮革加工などの各種手工業の展開(鈴木 2016、藤村 2017)、馬



第90図 甲斐地域における有力階層の鉄鏃組成

匹生産の可能性(大谷 2016)、交通上の拠点としての地域開発(菱田 2018)など、さまざまな論点が提示されているが、これらの諸特徴について、軍事的側面も考慮した評価も検討していくべきなのかもしれない。後の東海道と東山道を結ぶジャンクションとしての役割を有した富士山南麓地域は、畿内の王権からみれば、後の清見関のすぐ外側、東国経営の最前線ともいえる軍事的要衝の地として捉えられる。農耕生産の基盤も十分とはいいがたい当該地において、百基単位の群集墳が複数並立する背景には、有事の際には自前で装備を調べ、兵として出奔できる生産技術を保有した集団が複数存在していた可能性を想定しておくことも必要であろう。

3 東平1号墳出土鉄鏃の意義

前節までにおいて、東平1号墳出土鉄鏃の形態的特徴と駿河東部地域における鉄鏃組成の変遷についてみてきた。それらの成果を基に、本節では東平1号墳出土鉄鏃の意義と被葬者像について検討し、まともに替えたい。

帰属時期 個別の鉄鏃についてその特徴と駿河東部地域内の類例から判断される帰属時期を述べてきた。まず帰属時期については、平根三角形式、腸挟三角形式長頸鏃、平根五角形式の形態から、遠江IV

期前葉（飛鳥Ⅱ）頃と捉えた。追葬も当然想定しておくべきではあるが、鉄鏃の形態的特徴からは、積極的に時期差を導く型式差を抽出することはできない。三角形式や五角形式にみられた規格性からも、鏃束の別はあったとしても、初葬者の生前の権力や生産基盤、交流網を象徴するために、大きくは一括で用意された鏃群と判断してよいだろう。

鉄鏃生産と流通の掌握 五角形式や短小な鏃身部の片刃箭長頸鏃は在地における鉄器生産の可能性を示唆する。また東日本で広域的な「地域型式」である平根腸挟三角形式長頸鏃の存在は、そのような地域内生産が東日本各地との情報共有のなかで成熟していった過程を推察させる。鉄鏃組成の観点からは、6世紀後葉以降のそれとは大きく異なり、平根系が五角形式と三角形式に収斂され、かつ腸挟三角形式長頸鏃も取り入れた新しいスタイルであり、当古墳の被葬者がそうした新様式を積極的に推進した発信源たる指導者の一人であった可能性も指摘される。

伝法古墳群の系譜 東平1号墳が所在する富士山南麓地域の伝法古墳群内には、遠江Ⅲ期中葉（TK43型式併行期）に東海地域では極めて希少な鍛冶具を副葬する中原4号墳が築かれ（鈴木2016）、その後もⅢ期末葉（飛鳥Ⅰ後半）には、やはり鉄器生産と関連する祭具とされる鉄鐸や渡来系集団とのかかわりを示唆する雁木玉を副葬する国久保古墳の存在が確認されている（藤村2011）。7世紀中頃のⅣ期前葉（飛鳥Ⅱ）段階に伝法古墳群の最上位階層の地位にあった東平1号墳の被葬者は、そうした系譜を引く鉄器生産技術者集団を直接あるいは間接的に管理する立場にあり、自身の築いた東日本諸地域との広域ネットワークを背景として、鉄鏃新様式の創出にみられるように、その生産力をさらに向上・展開させていったことが推察される。そして、そのような指導力を発揮するに至った背景に、後の東海道と、東山道へとつながる中道往還の結節点に位置する伝法古墳群の集団の長として、駿河東部地域の集団間における軍事的結束の一翼を担ったことも想定できるかもしれない。

おわりに

雑駁ではあるが、東平1号墳出土鉄鏃をめぐる問題とその特徴・意義について述べてきた。東平1号墳は、畿内の王権から下賜されたとみられる銀象嵌装大刀や銅製壺鐙といった東日本諸地域に遍在する副葬品の存在から、王権から重要視されていた東国の最前線たる地域指導者の姿をうかがうことができる（本書、大谷論考）。また丁字形利器の存在からは、渡来系集団の系譜を着実に受け継いだ被葬者の姿も想定される（同、佐藤・鈴木論考）。

鉄鏃の分析では、上述した広域的ネットワークを背景として、駿河東部地域やさらにローカルな富士山南麓地域において、東平1号墳の被葬者がいかなる役割や影響力を発揮したのかを描き出すことが、少なからずできたのではないだろうか。地域型式主体・平根指向の古墳の分布域は後の富士郡に、共有型式主体・尖根指向の古墳分布域は後の駿河郡や伊豆国に相当し、畿内の王権とのかかわり方の違いが、律令期以後の地域発展の方向性にもかなりの影響を与えたことが予想される。この点は、今後の地域研究にとって、重要な視座となるだろう。

以上のように、重層的な古代の交流関係や複雑な地域社会を鮮明に描くことのできる可能性を秘めた東平1号墳の副葬品群は、当市のみならず、県内外の古墳時代研究にとっても重要な価値を有した一級の資料群として、今後のさらなる活用が期待されるものである。

註

- 1 鉄鍬の形式分類については、基本的に静岡県鉄鍬集成(大谷 2003)に即した。広域的な鉄鍬研究との対比から特に長頸鍬・短頸鍬と呼称する場合、前者は頸部長が鍬身部長の2倍以上あるものを、後者は2倍未満のものをそれぞれ指す(尾上 1993)。
- 2 内山敏行氏は2003年の論文では東日本の「専有型式」と呼称したが(内山 2003)、後に「地域型式」と改めている(内山 2011)。
- 3 一色 D-35 号墳は未報告資料であるが、富士市文化振興課に資料が保管されている。銅製銚帯金具の鉤尾も出土しているためⅤ期(平城)まで時期が下降する可能性もあるものの、方頭大刀に伴う銅製鞘尻金具(八木 2003 の B 鍬形《細》)に伴うとみれば、Ⅳ期後葉～末葉(飛鳥Ⅲ～Ⅳ)の範囲で捉えられる。
- 4 東平1号墳の鉄鍬は、本報告中でも述べられたとおり、概報作成時から現在までに破損・散逸してしまった個体が一定量存在するが、実測図は概報時の外形を基に復元している(第84図 38・42・43・44・49・51・63・65)。現在までに破損した頸部～茎部破片の一部は本報告第40図(武器実測図8)に示した資料の中に含まれると考えられるが、同定は困難であった。したがって、公表した実測図の茎関数では二重カウントのおそれがあることから、現在(本報告時)確認できる茎関数(26点)から同様に現在確認できる類円形関数(9点)の割合として、導いた。

参考文献

- 井鍋 誉之 2003 「富士川西岸～箱根西麓地域」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号(特集:古墳時代後期の鉄鍬)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 内山 敏行 2003 「古墳時代終末期の長頸鍬—東日本における棘関長頸鍬の分布と流通の諸面」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸面』七世紀研究会
- 内山 敏行 2011 「後期・終末期古墳出土の鉄鍬—東日本の場合—」『月刊 考古学ジャーナル』No.616(特集:後・終末期古墳出土の武器)
- 大谷 宏治 2003a 「地域区分、時期区分と鉄鍬分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号(特集:古墳時代後期の鉄鍬)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2003b 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鍬の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号(特集:古墳時代後期の鉄鍬)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2004 「東と西の狭間—古墳時代後期の鉄鍬にみる東海・甲信地域の特徴—」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 設立20周年記念論文集』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2016 「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被

- 葬者の性格」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 尾上 元規 1993 「古墳時代鉄鍬の地域性—長頸式鉄鍬出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』40(1) 考古学研究会
- 岡安 光彦 2013 「壬申の乱における兵器と兵士—考古学的検討—」『土曜考古』第35号(特集:武器・馬文化) 土曜考古学研究会
- 菊池 吉修 2008 「原分古墳出土の鉄鍬について」『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊池 吉修 2016 「中原4号墳出土鉄鍬について」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 鈴木 一有 2003 「副葬鍬の変質」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸面』七世紀研究会
- 鈴木 一有 2016 「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 田村 隆太郎 2003 「副葬鍬群への指向」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号(特集:古墳時代後期の鉄鍬)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鍬」『物質文化』物質文化研究会
- 津野 仁・内山 敏行 2017 「武器・武具・馬具」村上恭通 編『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館
- 豊島 直博 2002 「後期古墳出土鉄鍬の地域性と階層性」『文化財論叢』Ⅲ 奈良文化財研究所
- 長谷川 睦 2003 「静岡県における鉄鍬の地域色と生産・流通」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号(特集:古墳時代後期の鉄鍬)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菱田 哲郎 2018 「6・7世紀の手工業生産と地域の編成」『中原第4号墳の被葬者に迫る』平成29年度 中原第4号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム 富士市・富士市教育委員会
- 藤村 翔 2011 「国久保古墳の評価と被葬者像」『平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2016 「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 藤村 翔 2017 「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態—6・7世紀を中心に—」『東海における古墳時代的手工業生産の展開を考える』考古学研究会東海例会
- 八木 光則 2003 「7・8世紀鉄刀の面割と地域性」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸面』七世紀研究会

図の出典

第84図 本書

第85図 1・2・4・5～8・10・11：筆者実測、小田貴子製図、3・9：富士市教育委員会 2011『平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』

第86図 1・2・4：筆者実測、小田貴子製図、3：富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化時（古墳編）』、5：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『富士川 SA 関連遺跡（遺物編）』、6～9：前掲・富士市教育委員会 2011

第87図 原分古墳：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』、国久保古墳：前掲・富士市教育委員会 2011、大坂上古墳：前掲・富士市教育委員会 1988

第88図 1～16：富士市教育委員会 2016『伝法 中原古墳群』、17～25：沼津市 2002『沼津市史 資料編 考古』、26～28・31：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、29・30・41・43・46・47：前掲・筆者実測、32～40：本書、42・44・45：富士川町教育委員会 1994『室野坂古墳群』、48・50・51・54・55：前掲・富士市教育委員会 1988、52・53：富士市教育委員会 2013『船津古墳群Ⅱ』、56・57：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

第89図 谷津原7号墳：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、谷津原12号墳・室野坂B-4号墳・一色D-35号墳：前掲・筆者実測、東平1号墳：本書、国久保古墳：前掲・富士教育委員会 2011、船津L-62号墳：前掲・富士市教育委員会 2013、船津L-209号墳：富士市教育委員会 1999『船津古墳群』、原分古墳：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008

第90図 山梨県埋蔵文化財センター 2000『平林2号墳』